

Vol.18
2022年
春・夏号

上町台地 今昔タイムズ

企画・編集：U-CoRoプロジェクト・ワーキング
(CEL弘本由香里、B-train橋本護・小倉昌美)
http://www.og-cel.jp/project/ucoro/index.html

発行：大阪ガス エネルギー・文化研究所 (CEL)
*U-CoRo=ゆーころ (上町台地コミュニケーション・ルーム)
問合せ先：tel.06-6205-3518 (担当：CEL弘本)

「上町台地 今昔タイムズ」とは

わたしたちが暮らす「上町台地」。古代から今日まで絶えることなく、人々の営みが刻まれています。天災や政変や戦災も、骨しい都市化も経験しました。時をさかのぼってみると、まちと暮らしの骨格が浮かび上がってきました。自然の恵みとリスクのとりえ方、人とまちの交わり方、次世代への伝え方…。過去と現在を行き来しながら、未来を考えるきっかけに、U-CoRoプロジェクト第2ステップでは、壁新聞「上町台地 今昔タイムズ」を制作いたします。

再生の物語を求めて 台地の門前から 今に続く語りの世界

日本の仏法最初の官寺、聖徳太子の発願で、鎮護国家と万人救済の実践所として、上町台地に創建された四天王寺。やがて、その西門・石の鳥居は、極楽の東門と呼ばれるようになり、平安時代末期から中世へ、西方に広がる海を眺め、夕陽の向こうに極楽浄土を重ねて拝む、聖なる地に動乱の時代、そこは、苦しみ、果てを生きた人々が、救いと再生の物語を求めてやまない、無縁平等の広場ともなり、また、苦難の境涯から、四天王寺を経て、復活する主人公と連れる道行。さらさらを擦りながら語る説経節が現れる小説や戯曲へと続く、物語の源流がそこにあります。

中世、宗教都市だった四天王寺 苦しむ人々を迎え入れた救済の地

上町台地北端に難波宮があった時代、四天王寺はその南に位置する中核施設として、中世に都と周辺を合わせた一つの宗教都市を形成しており、十五世紀の史料によると、周辺には七千戸の家があったと推定。門前には宿もあり、熊野街道の通り道で、熊野詣での旅人たちが往来しました。四天王寺は、様々な時代に、庶民の厚い信仰を集めるとともに、聖徳太子の遺徳を継いで、社会からこぼれ落ちる苦しむ者たちを迎え入れ、最後の拠り所にもなりました。

（四天王寺に「時宗講」の伝説あり）
（『源氏物語』巻末、第9巻）

民衆の語り芸能、説経節 遊芸人が運んだ「救いの物語」

説経節は日本の中世末から近世にかけて盛んだった語り芸能で、仏教の唱導（説教）から派生して成立した民衆芸能だと言われています。近世には、操り人形として小屋で演じられて人気を博し、江戸時代の元禄頃までがその最盛期でした。内容の多くは、つらい境遇においても、やがて二筋の光が差すことを教える「救いの物語」。こうした哀話には、遊芸人たちによって街道筋を運ばれたと言います。

（説経節を語る遊芸人の図）
（『源氏物語』巻末、第9巻）



「一遍聖絵」に描かれた中世の四天王寺

語り念仏で知られる時宗の開祖、一遍上人が衆生済度のため念仏を民衆に配りはじめたのは四天王寺の西大門の前。「一遍聖絵」巻2には、中世の四天王寺と一遍上人の活動が描かれ、西門の西方（左）には木の大鳥居（石造は1294年から）があって、その西側にはすぐに砂浜と海が続く。（『一遍聖絵』の模写本、第2巻）

漂泊の末に辿り着いた再生の地

「さんせう太夫」の系譜

今も知られる「安寿と厨子王」の物語は、説経「さんせう太夫」①などが元になっている。説経では姉弟は騙され人買いの手に落ちるが、厨子王は安寿の犠牲により奴隷の身から脱する。しかし、すぐの再起はならず、流浪し落着いた末に四天王寺に辿り着く。そこで厨子王は再生の道を歩みはじめ、やがて出世し人買いに復讐を果たす。森鷗外の小説「山椒大夫」②（1915年）はこれに材を取ったもので、近代的な解釈のもと残忍な復讐譚の趣は薄れている（そのためここでは四天王寺の場面は出てこない）。その後この物語は児童向けの読み物や絵本③になり、また映画化④もされている。

山椒大夫・高

④「せつきやうさんせう太夫」挿絵
四天王寺西門前で、落着いた厨子王が阿闍梨に出会い立ち上がる。（江戸時代の説経正本（1656年）、近代の複製本）

③「安寿と厨子王」
戦前～戦後に出版された講談社の絵本シリーズ。

②映画とアニメーション
溝口健二監督の「山椒大夫」は1954年、第15回ヴェネチア国際映画祭で銀獅子賞を受賞。アニメ映画「安寿と厨子王丸」は1961年公開。（現在のDVDのパッケージ）

そこは復活への道行を象徴する場に

中世の語り芸能、説経節の代表作「さんせう太夫（しんとく丸）」では、四天王寺が主人公の復活の舞台として登場。また、説経「かるかや」・小栗判官でも、上町台地は道中の重要な場として登場します。この地は、漂泊の途上での成長と再生の物語を胚胎する場所でした。

扁額には「釈迦如来 転法輪処」とあり、四天王寺西門の中心にあり、四天王寺西門が極楽浄土の東門に当たるとして、

絶望から救いの光が射す場所へ

⑥「せつきやうしんとく丸」挿絵
絶望に陥っていた、しんとく丸の枕元に清水の観音が現れる。（江戸時代の説経正本（1648年）、近代の複製本）

⑦「撰州合邦辻」
現在も上演される文楽・歌舞伎の名作。毒を盛られた後徳丸だが、実はそこには娘母・玉手御前の一途な真心が秘められている。（人形浄瑠璃文楽「撰州合邦辻」より、後徳丸と玉手御前、写真・渡邊肇）

⑧小説「身毒丸」から戯曲・落語まで
この物語をモチーフに業病を持つ田楽法師を描いた折口信夫の小説「身毒丸」（1917年）があり、寺山修司の舞台作品が生まれた。また三島由紀夫は『近代能楽集』に戯曲「弱法師」を書いた。パロディとしては、落語演目の「弱法師」一葉乃（ながの）息子があげられる。

父を探し高野へ 向かう「かるかや」の系譜

この話は、中世の説経「かるかや」⑨をはじめ、江戸時代以降、浄瑠璃、歌舞伎、読本などのかたちで作品化されている。妻子を捨てた出家した武士、町童連心とその息子石童丸の物語で、父を知らずに育った石童丸は母と共に父親探しの旅に出る。父らしき者がいるという高野山に向かう旅の途中で、二人は上町台地を通る。

石童丸と母は旅の途中で父が高野山にいることを知る。（説経正本「せつきやうかるかや」（1631年）の挿絵）

熊野に続く聖なる道筋「小栗判官」の系譜

上町台地は、都から熊野に向かう熊野街道を通る。別名小栗街道とも呼ばれ、その由来となったのがこの物語。謀略により毒殺された小栗判官が、閻魔大王の計らいで熊野阿弥となつてこの世に戻り、土車に乗せられて人々に引かれ、熊野の地で復活を遂げる。これに材を取って近松門左衛門「当流小栗判官」を書き、また歌舞伎にもなり、絵巻⑩に描かれ、仮名草紙や読本として受け継がれた。近代では講談でも語られ、スーパー歌舞伎「オグリ」ほか舞台作品にもなっている。

江戸時代に描かれた絵巻物

江戸時代に描かれた「小栗判官絵巻」では、戦鬼阿弥になった小栗判官は熊野を目指す途中で上町台地を通る。「小栗判官絵巻」伝説巻（兵衛、第13巻第24段）天守宮内、内三丁の九角蔵前所蔵。

語りの力再び、喜怒哀楽を分かち合う


その昔、動亂の世を生きた人々は、救いと再生の物語を求めて、上町台地を行き来しました。物語を求める市井の人々の層の暑さ、豊かな喜怒哀楽の風土ごと、さまざまな芸・文化を生み出し育んできた、大阪・上町台地の力ともいえるでしょう。今、再び、大きな社会の変化の只中で、直面する格差や分断、孤立の闇を越え、人々の心を和らげ、頬をほころばせ、成長や再起を支える、無縁平等の広場のような場所が必要とされているのではないのでしょうか。そんな想いを抱いて、まちなかに目を向けてみるとどうでしょう。一人ひとりの人生に寄り添い、喜怒哀楽を分かち合う、この地ならではの語りの場が息づいていることに気づかれます。

再生の物語を求めて 台地の門前から今に続く語りの世界

1 隆祥館書店

物語の力で母と子の つながりを育む

ママと赤ちゃんのための集い場づくり



2 大阪藝術劇場

路地の暮らしの中から新しい物語を紡ぐ

楽しく遊びながら、大阪の演芸のルーツ「俄」の再現を目指す



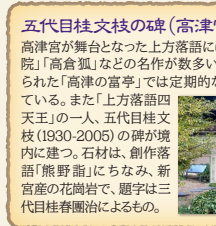
●今、私が祖先からの贈り物である古い長屋を「大阪藝術劇場」として活用しているのは、路地暮らしの基本「おかげさす」の気持で、地域のたくも役立てていただきたんと思っただけです。名付け親は「近所のおじさん」で阪大の構内節也教授、看板文字は高津宮の小宮真功宮司によるもの。その縁で高津宮の「とこしえ秋祭り」にはお祭所として前の路地で演芸の奉納をしています。その後、東西屋の林幸治郎さんも「俄（にわか）」を演じてくださった。俄（仁輪加、二〇加などとも書く）は、即興でそこにあるものを使っておもしろいことをする芸。林さんに話をすると、チンドン屋も俄も路上の芸だと言って、その復活に賛同してくださった。実は父の秋田實も生前、俄について資料を集めていましたが、俄師の芸が近代の劇場演芸のルーツの一つだということ。内容は歌舞伎のパロディなどが多く、一般の人でも即興でやっただけで、例えば住吉神社のお土産の竹馬に空の小さな酒樽を括り付けて提灯に見立てたり、衣裳も羽織を履いて袴に見せたりしました。もちろん観の方も歌舞伎の場面を皆が知っているからおもしろい。だから現代に昔のままに復活させておもしろくない。俄の本質はやはりその場の即興的で、演じる人と観る人の両方がいっしょに立ちます。要するに場が大事ということで、私たちも、ご縁を大切に、この路地で機嫌良く遊んでいるわけです。（藤田富美恵さん談）

●臨床心理士の方を講師に、毎回8組ほどのお母さんと赤ちゃんに集まってもらって、子育てママの「集い場」づくりをしています。二村知子さん（隆祥館書店店主）ここはまちなかの小さな本屋ですが、地域に開かれた書店を心がけていて、近所のお母さんたちとも連れだてて気軽に立ち寄ってくれます。ただ、お話をしていると、初心者ママさんにとっては、テレビやネット、SNSなどで、アクセスできる育児情報はたくさんあるのだけれど、実際の生活では、日々なんとも言えないことで大変さが募って孤立感に包まれ、表情も険しくなりがちなのだそう。だから、そんなママたちの悩みを聞くだけでも少しは気分が楽になるのでは、絵本を通した集い場づくりをしようと思っただけが始まりました。毎回、最初に絵本の読み聞かせをし、創作の時間では、赤ちゃんや乳幼児が楽しめるようなものを作ります。残りは、子育て相談の時間です。読み聞かせでは、ほんとうに赤ちゃんたちの反応がはっきり見て取れます。例えば「くつついた」の絵本では「おかしな」とわたしが「くつついた」の場面になると、5か月の赤ちゃんの目が輝くのがわかります。同時にママたちの顔もずいぶん晴れやかに感じられるようになっていきました。（二村知子さん談）

藤田富美恵さん（児童文学作家、藤田カナルチャーム心療養学講師）
大阪藝術劇場：藤田さんの家の裏路地にあった明治時代の三軒長屋を改装。かつての「大阪時代」に思いを馳せ、この路地と建物を文化の力で活用しつつ保存しようというプロジェクト。

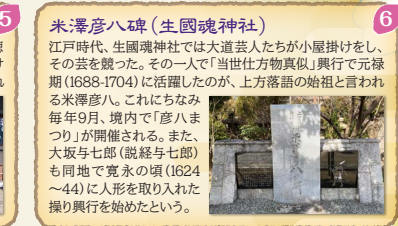
5 五代目桂文枝の碑（高津宮）

高津宮が舞台となった上方落語には「高津の富」「崇徳院」「高倉孤」などの名作が数多い。現在、境内に建てられた「高津の富」では定期的な落語会も開催されている。また「上方落語四天王」の一人、五代目桂文枝（1930-2005）の碑が境内に建つ。石材は、創作落語「熊野詣」にちなみ、新高産の花崗岩で、題字は三代目桂春園治によるもの。



6 米澤彦八碑（生國魂神社）

江戸時代、生國魂神社では大道芸人たちが小屋掛をして、その芸を競った。その一環で「当世什物真似」興行で元禄期（1688-1704）に活躍したが、上方落語の始祖と言われる米澤彦八。これにちなみ毎年9月、境内で彦八まつりが開催される。また、大阪与七郎（説経与七郎）も同じで寛永の頃（1624～44）に人形を取り入れた振り興行を始めたという。



3 一心寺日曜学校

講話とともに語りの芸が心に深く響く

来訪者の人生の安らぎの広場でありたい

- お寺の存在理由を考えると、基本的には「世のため人のため」という信念が私にはあります。それゆえに一心寺では、お骨仏を造立し、法要などに求められる方のため、様々な施設の建設や拡充を進めてきました。日曜学校もそうした信念による活動の一環です。内容としては、聴講だけでなく、皆さんは道の掃除や募金活動などにもご参加いただいています。（高口恭行さん談）
- 毎回、講話に加えて演芸や様々なエンターテインメントの時間も設けています。人気が高いだけでなく、その内容に心に響くものがあるよう反響も大きいですね。（横瀬尚隆さん談）
- 説経節や落語などの語り芸は、寺での法話が一つのルーツだとも言われています。日曜学校では、私自身も小説などの朗読をすることがありますが、落語、講談、浪曲などのほか、演芸的なものをみなさん本当に楽しみにされています。（高口真吾さん談）
- 仏教の教えも真面目な話ばかりでなく、本来は楽しくあります。笑うというのが何よりも大切なことです。参加者の多くの方は、単に慰安を求めて来られるだけでなく、人生の悩みを抱えつつここにやってくる。だから、私は、施設であれ、心のなかであれ、人が安らかに集うことができる広場をつくりたいと願っています。（高口恭行さん談）

4 一般社団法人てづくり紙芝居館

紙芝居は、創作と語りと場との総合文化

使いながら傳承したい、紙芝居に込められたそれぞれの物語

- ここでは、印刷、手描きなどのジャンルにこだわらず、紙芝居の関連資料を保存しています。その中には手持ちのものを全部預けてくださった街頭紙芝居のおじさんの自作の作品もあります。それぞれに深い想いが重ねられているようですね。そうい紙芝居をただ保管するだけでなく、使って生かしながら伝えていきたい。対象は幼児から大人まで、高齢者向けのものもあります。また、ドイツの仲間（クルマン枝川川口）もいますが、紙芝居は国際的にも注目され、最近では海外への普及の機会も増えています。（大塚珠代さん談）
- 紙芝居も日進月歩しています。今流行のお笑い芸人さんのフリップ芸は、紙芝居の特性を生かした芸能の一つだと考えられます。また、ある書物に書いてあったのですが、紙芝居の本質は、絵と演者、演者と観客、そして観客同士の交流を図る「場の文化」にあるということです。この三つの関係性からなる空間が、楽しく感じられる感るほど、「場の文化」が一層濃まっていくよう。（山口文子さん談）
- 最近リモートでもするのですが、いつも何か足りない思いがあります。大勢の人が小さな画面や演者の語りにも引きこまれるときに感じられる素直な喜びが原点、独特の時間と空間がそこ生まれてくるのが一番の醍醐味です。（大塚珠代さん談）

●一心寺日曜学校：毎月第4日曜日の早朝から三時開堂で日曜学校を開催。講話の前に、毎回音楽、演芸などのコーナーを設けている（コロナ禍で2021年度は休止したが、今春の再開を現在検討中）。

●寺の存在理由を考えると、基本的には「世のため人のため」という信念が私にはあります。それゆえに一心寺では、お骨仏を造立し、法要などに求められる方のため、様々な施設の建設や拡充を進めてきました。日曜学校もそうした信念による活動の一環です。内容としては、聴講だけでなく、皆さんは道の掃除や募金活動などにもご参加いただいています。（高口恭行さん談）

●お寺の存在理由を考えると、基本的には「世のため人のため」という信念が私にはあります。それゆえに一心寺では、お骨仏を造立し、法要などに求められる方のため、様々な施設の建設や拡充を進めてきました。日曜学校もそうした信念による活動の一環です。内容としては、聴講だけでなく、皆さんは道の掃除や募金活動などにもご参加いただいています。（高口恭行さん談）

●毎回、講話に加えて演芸や様々なエンターテインメントの時間も設けています。人気が高いだけでなく、その内容に心に響くものがあるよう反響も大きいですね。（横瀬尚隆さん談）

●説経節や落語などの語り芸は、寺での法話が一つのルーツだとも言われています。日曜学校では、私自身も小説などの朗読をすることがありますが、落語、講談、浪曲などのほか、演芸的なものをみなさん本当に楽しみにされています。（高口真吾さん談）

●仏教の教えも真面目な話ばかりでなく、本来は楽しくあります。笑うというのが何よりも大切なことです。参加者の多くの方は、単に慰安を求めて来られるだけでなく、人生の悩みを抱えつつここにやってくる。だから、私は、施設であれ、心のなかであれ、人が安らかに集うことができる広場をつくりたいと願っています。（高口恭行さん談）

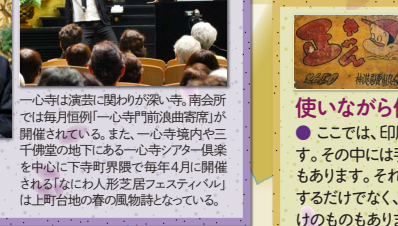
11 てんじ村記念碑

かつて西成区山王町にあった「てんじ村」。新世界に近く、劇場の出演者の芸人たちが1950年代には300人以上住んでいたという。難波利三が直木賞受賞作品の「てんじ村」で描いたことでも知られる。現在、秋田實筆の「てんじ村記念碑」が阪神高速の阿倍野入口横に建つ。

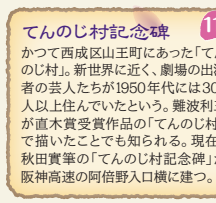


7 秋田實実魂碑（玉造稻荷神社）

「大阪漫才の父」と呼ばれる漫才作家・秋田實（1905-77）の碑が、子ども時代の遊び場所だった玉造稻荷神社の境内に建つ。玉造は、かつて興行街があり、多くの芸人たちが住んだ土地。これにちなんで毎年7月の玉造稻荷神社の夏祭では、奉納演芸大会が開催される。




てづくり紙芝居館



10 俊徳街道・俊徳地蔵尊

河内高安の長者の寺。俊徳丸が四天王寺へ通ったと言われる道筋は「俊徳街道」と呼ばれており、今も近鉄「俊徳道」駅をはじめ東西の「俊徳地蔵尊」など、沿道付近の施設・旧跡に「俊徳」の名が残る。




一般社団法人てづくり紙芝居館

坂電電気軌道「帝塚山」駅目の前で2020年に開設。毎週火曜日の夜、紙芝居と駄菓子を楽しみに近所の子どもたちが大勢やってくる。出張紙芝居も盛況で、最近はそのほかの上演も行っている。

